この想いの名前は知らない

【後日談】あの日の問いの、こたえ

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15448217

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, ダイ大小説50users入り, エイミ(ダイの大冒険)

地底魔城ヒュンマの「この想いの名前は知らない」novel/15168077後日談。
フォロワー様のひとことで生まれた作品。
2012.6.12ヒュンマオンリー設置のweb拍手お礼画面から再掲載。

web拍手そのものは、プロフィール画面に設置（2021.6.18）

【後日談】あの日の問いの、こたえ

　かつて、俺の手で滅ぼした国の人々が、戦勝の宴に沸いている。
　その光景を背に、俺は、かつての僚友とともに、この場を後にしようとしていた。
　俺の故郷であったかもしれない国。
　だが、いまや、俺を仇と憎む人々の住まう国。
　真の意味で俺を救ってくれた、俺のおとうと、いもうと弟子たちには何も言わず、俺たちは偵察の旅に出ようとしていた。

　不意に、背後から俺を呼ぶ声がした。
　振り返ると、そこにあったのは、俺が最も会いたいと願い、そして同時に、最も会いたくないと思った少女の姿だった。
　彼女は、不安げな瞳で俺を見上げていた。
「・・・どこへ行くの？」
　俺は、大魔王の居城に偵察に出るのだと、ただ事実だけを伝えた。
　だが、それを伝えると、彼女は、一層、眉根を寄せ、泣き出しそうな顔になった。
　傍らに立つ獣王が、何かを察し、俺に言った。
「俺は先に行く。あとからゆっくり来てくれ。」
　それだけ言うと、彼は俺の側から離れて行った。

　思いがけず二人きりになり、俺は所在なく立ち尽くしていた。彼女は俺の前で何も言わずにうつむいている。
「・・・少し、歩くか。」
　俺がそう言うと、彼女は、うつむいたまま頷いた。

　そうはいっても、あてがあるわけではない。ただ、彼女といるところを誰にも見られたくなかったから、宴に背を向けて荒野に向かって足を進めた。
　俺の背後につかず離れず、彼女の足音が続いていた。

不意に、俺の外套が後ろから引かれた。
　俺は、急に引き留められたことに気づき、足を止めた。振り返ると、彼女が、うつむいたまま俺の外套の端をつかんでいた。
「もし・・・。」
　彼女が、下を向いたまま言葉を絞り出した。
「もし、私が行かないでって言ったら、ここにいてくれる・・・？」
　俺は少し考えて、以前と同じ言葉を口にした。
「・・・それは無理だ。」
　俺の答えをわかっていたのだろう。彼女は何も言わなかった。
「これからの戦いを考えたら、大魔王の戦力や状況を把握するのは、戦略的に不可欠だ。偵察に行くのなら大人数ではかえって目立つ。大魔王の居城の内部まで把握している、元魔王軍の俺達が行くのが適任だろう。」
　淡々と、軍事的な利点のみを俺は説明した。
　別に嘘はついていない。
　だが、俺が偵察に出ようと思った理由のすべては口にしなかった。

　この少し前、魔軍司令との戦いの中、決してかなわないであろう強敵であったのに、おとうと弟子が、必死で彼女を守ろうとする姿を目の当たりにし、俺は、彼の中に隠されていた特別な思いに気が付いてしまった。
　それとともに、俺は、強い後悔にさいなまれた。

　何故、あの日、地底魔城で彼女にあのようなことをしてしまったのか。

　もちろん、誰にも言うつもりはなかった。
　同じ男を師と仰ぐ俺のおとうと、いもうと弟子たちは、明るい光の下しか知らないように思え、俺は、彼らとはあまりに不釣り合いに感じた。
　彼らと接するうちに、俺は、彼女に触れるべきではなかったのだ

という思いに駆られた。
　しかし、同時に、あの夜の出来事は、闇の中で輝く恒星のように、俺の中で確かな思い出として息づいていた。

　俺の感情も、あの日の出来事も、仲間たちの誰にも気づかれるわけにはいかなかった。だから、俺は、彼女のそばを離れるしかないと思った。
　それなのに、彼女は俺を追ってきた。そして、行かないでほしいと言ってくれる。その願いは、あまりにもいじらしく、愛おしかった。

　彼女は、うつむいたまま、言葉を絞り出した。
「私・・・地底魔城が崩壊したとき、あなたにはもう会えないのだと思ったわ・・・。でも、あなたは生きていてくれた。あなたにまた会えて、あなたが助けに来てくれて、私は・・・本当にうれしかったの。」
　あの日の夜と同じようにまっすぐな言葉だった。俺は、何も言えずに、ただ彼女の言葉を聞いていた。
「私、あの日にあなたに言ったことを取り消すつもりはないわ。私があなたの居場所になるって・・・。だから・・・お願い、必ず、帰ってきて。」
　顔を上げた彼女の瞳には、あの日のように、涙がにじんでいた。そしてまた、あの日と同じように、それを必死でこぼすまいと、懸命に耐えていた。

　俺は、彼女にぽつりとつぶやいた。俺が押さえつけてきた本心の一つだった。
「あの日、俺は、結局、俺の部下たちを守れなかった。ふがいない将だった。」
「そんなことない！」
　彼女は必死になって反論をした。
「だって、地底魔城の崩壊は、どうしようもなかったんですもの。あんなマグマの海、誰にも止められるわけがないわ。

それに、私は知っている。あなたの部下たちがどれほどあなたを信頼していたのか。どれほどあなたを尊敬していたのか。
　だから、きっと、あなたが生きていてくれて、彼らは喜んでいるわ。」
　まっすぐな彼女の言葉が染みわたる。俺は自然に彼女に礼を述べていた。
「ありがとう。お前の言うとおりだとしたら、俺も嬉しく思う。」
　ようやく彼女は笑ってくれた。温かい笑顔だった。

　その笑顔を壊したくはなかったが、俺は自分の考えを言わざるを得なかった。
「俺は、今は、この先をどう生きていいのかわからない。姫は、俺にアバンの使徒として生きることを命じた。だから、お前たちと一緒に大魔王と戦っていこうと思う。だが、俺の手は血で濡れている。この国の大勢の兵の血でな・・・。」
　彼女はかぶりを振ったが、俺は彼女の否定をさらなる否定で返した。
「そんなこと・・・。」
「事実だ。」
　短い俺の言葉に、彼女は口をつぐんだ。
　俺は、彼女に言葉をかけた。
「だから、今は、俺は、お前にも何も言えない。」
　黙ったまま、俺から視線を外した彼女に、俺はいま、口にできるだけの言葉を紡いだ。
「だが、この戦いが終わった時、俺が自分の生き方を見つけられたのなら、そのときはもう一度、お前と話をしたいと思う。」
　彼女を見つめながら、俺の中で、地底魔城での一夜の記憶が蘇った。
　あれだけのことをしたのだから責任を取るべきだという感情と、彼女には俺のことなど早く忘れさせた方がいいのだという思いの間で引き裂かれる。
　いや、それは、いずれも建前にすぎない。
　心のままに行動できるのなら、自分が願うことは一つしかなかっ

たのだから。

　あの日、「どうして」と問うた彼女に対し、わからないとしか言えなかった、その心の内を、いまなら言葉で表すことはできた。
　だが、それを口にすることは、いまはまだ、できなかった。

　俺は、彼女の背に腕を回した。外套で彼女の身を包み、そっと抱きしめた。
「・・・今はこれが精いっぱいだ。」
　そのまま、彼女の耳元でささやいた。
「また会おう、マァム。」
　彼女の腕が、俺の背に回されるのを感じた。
「・・・気を付けて。」
　最後の言葉は、涙にぬれていた。

ヒュンケル

　それは突然の告白だった。
「私は、彼を愛しています。」
　そう言って、修理されたばかりの鎧の魔槍を胸に抱いた風の賢者は、私にはっきりとした意志をぶつけてきた。
　自分の手で、彼にこの槍を渡したいのだと。
　それは、言外に、私は彼にとって何者でもないのだという意味を帯びさせていた。

　私は、いたたまれずにその場を後にした。
　彼は、あのひとの気持ちを知っているのだろうか。
　そして、知っているのなら、何と答えたのだろうか。
　それを知りたくなくて、私は、振り返らずに外へと出た。

　そう、確かに、彼が私たちの仲間となり、「アバンの使徒」の長兄と遇されるようになってときが経つにつれ、彼の理解者は増えていった。

元来が、優しく、まじめで、自分にも厳しいストイックな人だ。
その志の高さに惹かれる人が増えるのも無理からぬことだった。
あの大人の女性もその一人だったのだ。
そして、私は、彼女の強い感情に向かっていけるほど、自分の思いに自信もなかった。
彼をどう思っているのかすら、うまく言葉にできなかった。

今は自分の思いに振り回されている場合でないと思いなおし、私は、自分の心の迷いを封じた。今は、世界のために戦うべき時なのだから。

そうして、激しい戦いの中、仲間たちの思いが次々と明らかになっていった。
私は、自分の気持ちだけでなく、仲間たちの思いにすら気づけていなかったのだと思い知らされた。
知らず知らずのうちに、仲間たちを傷つけていたのだと、子どもすぎる私はようやく気付いた。
私は子どもだったのだ。
そう気付くと、なんだかひどく自分が彼に不釣り合いに思えた。

彼には、私しか知らない一面があった。
地底魔城で、彼が指揮官としてどのように過ごしていたのか。
側近のアンデッドモンスターが、彼のことをどれほど尊敬していたのか。
お父さんの最後の言葉が、どれほど彼を愛していたかをうかがわせるものだったのか。
・・・そして、彼と、あの城でどんな一夜を過ごしたのか。
どれも私しか知らない秘密だった。
でも、それをふりかざすのは卑怯だと思った。

以前、彼は、この先をどう生きていけばいいのかわからないと言っていた。
その答えが出せたのかはわからない。

彼が誰を選ぼうとしているのか、いえ、もう選んでいるのかもわからなかった。
でも、もし、彼がこの先を生きていく道しるべを見つけたのなら。
より広い世界に進むのなら。
そして、彼が、彼を強く思うあのひとを選ぶならば。
私は、あの日の思い出を胸にしまって生きて行こう。それで十分だ。
彼には、私のような子どもではなく、大人の女性がふさわしいのだから。
そう思って、戦いの中、私は自分の気持ちに封をした。

それなのに。
最後の幹部との終わりの見えない戦いが続き、私たちは疲れと絶望で、次第に攻撃がかわせなくなっていった。
そんな中、遂に、おとうと弟子が致命傷を受けたと思った、そのとき。
背後から、聞きなれた彼の声が響いた。
振り返ると、そこに彼の姿があった。
生きていてくれた。よかった。私は、その思いがあふれて、涙が抑えられなかった。
でも、すぐに、私は異変に気付いた。
彼がひとりで立てていない。
仲間の肩を借り、不自然な姿勢で立っている。
まっすぐに立てないほど傷ついているのだと気づいたとき、私は、ほかの誰のことを思う余裕もなく、彼に駆け寄り、その肩を支えていた。

きれいごとで覆い隠していた不都合な私の本心は、生身の彼の前に、いともたやすくさらけ出された。
もう自分に嘘をつけなかった。
彼が誰を思っていても、誰を選んでもそれでもいい。
きちんと、私の思いを言葉にしよう。

そして、もう一度あの時の彼の問いに応えようと思った。
　それこそが、私が自分自身と向き合うこと。
　初めて心から思いを寄せた彼に対する「自分のための愛」なのだから。

　あの夜、「なぜ」と問うた彼に対する答えの言葉は、いまは、私の中にある。

　しかし、大魔王との戦いが終わった後も、私たちに安息の日は訪れなかった。
　大事なおとうと弟子がいないのだ。

　最も死力を尽くし、誰よりもこの地上の平和を願った幼い勇者。
　空へと消えた彼を探して、私たちは奔走した。

　でも、何ら手掛かりすらなく、私は、重い気持ちのまま、先生の故郷に戻った。
　この街では、大魔王との戦いで深く傷ついた彼が、体を休めていた。
　彼に会いたい。
　その顔を見たい。
　私は、そう思って、彼の部屋を訪れた。

　しかし、彼の部屋の扉を開けた瞬間、私は激しく後悔した。
　ベッドの上に身を起こした彼の傍らには、彼を愛するひとがおり、嬉しそうに微笑んで彼と語らっていたからだ。彼女は自分の国に戻らず、彼に付き添っていたのだ。
　彼女は、私を見ると、悠然と微笑んだ。美しい笑顔だった。
　私は、様々な思いがごちゃ混ぜになって、泣きたくなった。

　気まずい気持ちのまま、彼の部屋で立ち尽くしていると、廊下から、彼女を呼ぶ、兵士の声がした。
　名残惜しそうな様子のあのひとに、彼が声をかけた。

「仕事なのだろう。俺にかまわず行ってくれ。」
「でも・・・。」
「大丈夫だ。」
　彼に背中を押され、彼女はしぶしぶ、部屋の外に消えた。

　二人きりになった。
　でも、いったい何を話せばいいのだろう。
　私は、来てはいけないところに来てしまった。
　大事なおとうと弟子が見つからないこの重い気持ちを慰めてほしくて、甘えに来ただけの私は、場違いだ。
　そんな私に、彼はゆっくりと声をかけた。
「・・・まだ、見つかっていないのだな。」
　私は黙ってうなずいた。
　彼は悔しそうに唇をかんだ。
「なぜ、あいつが・・・。」
　そう言って、彼の言葉の語尾が消えた。彼はこぶしを強く握りしめていた。
　彼が続けようとした言葉はわかっていた。
—あいつじゃなくて、俺が、消えるべきだったのに。
　でも、きっと、私が否定するとわかっているのだろう。彼は言葉を飲み込んだ。
　代わりに、彼は別の言葉を口にした。
「・・・すまない。俺もお前たちと一緒に探しに行きたいのだが・・・。」
　私はかぶりを振った。
「いいの。あなたの怪我が重いことはわかっているわ。だから今はゆっくり休んで。あなたは、十分戦ってくれたんだから。」
　彼は少し考えこむと、冷静な声で淡々と言葉を紡いだ。
「これだけ探してもあの付近にいないのなら、捜索範囲を広げる必要があるのだろうな。ことによれば、魔界にも捜索の手を及ぼす必要があるかもしれんな。」
「うん・・・。」
「そうなれば、魔界には俺が行く。」

私は驚いて聞き返した。
「えっ！？だって、危険じゃないの？それにあなたの身体だって・・・。」
　だが、彼は微笑んで答えた。
「大丈夫だ。俺は魔界で育った。ほかの者よりもあの世界には通じている。
　それに、俺は、地上では動きにくい。軍団長、だからな。」
　彼はあえて過去形にせずに言った。
　私は、またかぶりを振った。
「あなたは、アバンの使徒よ。」
「だが、姫の国の者たちにとっては、俺は友の、肉親の仇だ。この事実は、生涯消えない。」

　私は、彼が不死騎団長だったころを知っていた。
　彼を憎み、恨むたくさんの人たちがいることも知っている。
　亡くなった本人やその家族、友人にとっては、どんな慰めや、どんな彼の功績を前にしても、そんなものでは打ち消せないのだということは、父を亡くした私にもよくわかっていた。
　でも、それでも、私の大事ないもうと弟子の前では決して言えないけれども、私にはある思いがあった。

　私は、彼のベッドに近づき、その縁に腰掛けた。
　ちょうど彼の斜め後ろに腰を下ろした。
　彼の顔が見えなくなった。
　私は、言葉を抑えきれず、そっと、彼の背中に額を付けた。
　彼の驚きが伝わってきて、彼が振り返ろうとしたのがわかったが、かまわない。
「お願い、そのまま聞いて。顔を見たら言えなくなってしまうから。お願い。」
　必死に訴えると、彼は動きを止めた。前に向き直り、私から視線を逸らしてくれた。
　ありがとう。
　心の中で彼に感謝した。

私は、ずっと胸に抱えてきた思いを、少しずつ、声にしていった。
「私、あなたが不死騎団長だったころを知っている。不死騎団長として、あなたがどんなふうに戦ってきたのかも、あなたの部下や側近たちが、どれほどあなたを慕い、誇りに思っていたのかも知っている。」
　彼は何も言わずに私の言葉を聞いてくれた。
「あなたを憎む人がいるのも、恨む人がいるのも分かっているし、その人たちの気持ちもわかるわ。
　でも・・・彼らの前では決して言えないけど。
　私は、不死騎団長だったあなたを否定したくない。」
　ぴくりと、彼の肩が震えるのを私は感じた。
「だって、あなたが必死で生きてきた証だもの。守ってくれる人もない中で生き延びて、懸命に努力して築いたその結果ですもの。
　あなたの部下たちがあなたを慕う気持ち、あなたの側近があなたを誇りに思う気持ち。私は、みんな覚えている。
　たとえ、魔王軍という闇の中にあったとしても、あなたの部下や側近たちに一条の光を示して、尊厳を与えたのは、不死騎団長であったあなただったのだから。
　だから、世界中の誰もがダメだと言っても、あなた自身が後悔していても、私は、あなたが不死騎団長だったことは否定しない。
　だって、あのころのあなたがあったのだから、今のあなたがあるんだから・・・。」
　私は、彼の背に両手を添えて、自分の額を押し当てたまま、言葉をつづけた。

　彼には、憎しみのために生きてほしくはなかった。
　不死騎団長としての彼は、嘘と誤解で塗り固められた上に築かれていたことも、いまは分かっていた。
　それでも、あの頃の彼のすべてを否定したくなかった。

　あの頃からの私の思い。

今なら言えるだろうか。
　あのときは、わからないとしか言えなかった心の内を。
「私・・・あなたが・・・。」
「もういい、それ以上言うな。」
　私の言葉は、彼に押しとどめられた。
　思いのほか強い言葉に、私は驚き、身を震わせた。
　怒らせてしまっただろうか。
　不安になる。
「ご、ごめんなさい。」
　私は、彼から手を放そうとした。
　そのときだった。
―・・・え？
　次の瞬間、私の視界が遮られた。
　私の肩に、たくましい、太い腕が回されている。
　私は、始めは、自分がどうなっているのかもわからなかった。
　気が付くと、私は彼の腕の中にいた。
　彼は、振り返り、私を強く、その胸にかき抱いていた。
　私の頭は、彼の胸に押し付けられており、彼の表情は見えなかった。
「・・・もういい、十分だ・・・。」
　彼の声が震えていた。
「俺は、お前に、何も言葉にしてこなかった。何も、約束できなかった。
　それでもお前は・・・俺に手を差し伸べてくれるのだな・・・。
　お前に伝えるべき言葉は、あのときも、いまも、たった一つしかなかったんだ。」
　そうして、彼は、私の耳元に唇を寄せた。
　よくとおる、低い声が響く。
　私の大好きな、落ち着いた声色。
「愛している、マァム。」
　あの日、地底魔城で聞けなかった言葉が、私の中に染み入るように響いた。それとともに、私は、自分の頬を涙が幾筋も伝っていくのに気付いた。

私は、彼を抱きしめ返した。
そして、何度もつぶやいた。
「あなたが好き・・・あなたが好きなの・・・。」
あんなに言えなかった言葉が、流れるようにあふれてきた。
彼は私の言葉を聞きながら、私を強く、抱きしめ続けた。
温かい腕の中。

私は、ずっと、彼の居場所になりたかった。
でも、ようやく気付いた。
この腕の中にいたいと思う。
彼こそが、私の居場所だったのだ。

マァム